


 巻頭言

植物防疫に従事して

 茨城県農業総合センター か鹿 しま島 てつ哲 ろう郎


早いもので、私は入庁 35 年目となりました。

37 年前の大学院のときに、研究室の助教授が農業環境技術研究所、化学メーカー、茨城県との共同研究で施設栽培ピーマンのタバコガの交信かく乱に関する研究を行っていました。茨城県は、圃場、現地試験を担当していました。アブラムシ類が難防除害虫だった時代に、果実に食入するタバコガは実害の大きい厄介ものでした。私は、その現地試験に同行し、調査を手伝う傍らでそれぞれの立場の方から様々なお話を伺うことができました。試験場では効果があるのに、現地では効果がない。その原因の一つとして、ハウスの隙間から交尾雌が侵入することが考えられ、実際、ビニールや防虫ネットの破れた部分から被害が広がっていました。経営面積が大きく、防除にかかる日数も多く補修の手が回らなかったのです。最終的に交信かく乱剤は製品化されず、実用化の過程にはいくつもの大きな壁があることを知りました。そこでの研究者の仕事ぶり、農業や防除の現場を見たことが、県職員（試験場）を希望する直接のきっかけとなりました。

入庁後は、振出しの土壤肥料担当、途中の普及所を除く 30 年間、研究所や防除所で植物防疫に従事することができました。それしかできないことの裏返しで、自分は一体何をしたらだろうか、と猛省するばかりですが。

さて、私は、2022 年度に茨城県病害虫研究会長を拝命いたしました。当研究会は、1960 年に設立された任意の研究会で、本年で 63 周年を迎えました。一県の任意研究会で 60 年以上活発に研究発表などが行われているのは、ひとえに歴代の会長や執行部、会員の皆様の病害虫問題に対する意識の高さ、防除技術に対する熱意の賜物と感謝する次第です。ある会が長年続くと、ややもすると伝統ある会を終わらせないことに奔走しがちです。たとえ意義のある目的を掲げ、伝統と実績があるとしても、会を残すために会を続けるのであれば、それは無いのと同じです。60 余年間の諸先輩方の功績に敬意を払いつつ、これから解決すべき問題を共有し、会員一人一人がそれぞれの立場で植物防疫に貢献できるよう、会の在り方を考えていくのが私に与えられた役目だと思っています。COVID-19 感染症拡大の影響で中止、Web 開催が続き、本年は 4 年ぶりの対面開催となります（執

筆時点）。議論を深め、活発な意見交換が交わされることを願っています。

ところで、茨城県病害虫研究会報第 1 号（1961 年発行）を見ると、第 1 回特別講演では、農林省農業技術研究所から石井象二郎先生をお招きしてご講演いただいています。

そこでは、「害虫の薬剤防除に関する 2.3 の問題」（AgriKnowledge に掲載あり）と題し、以下の 4 点が指摘されています（表現は一部改変）。

- ①広い面積の薬剤防除は、ある害虫の環境抵抗を変えている。
- ②生産費の問題、より合理的な防除の必要性。
- ③薬剤抵抗性害虫の出現。
- ④殺虫剤の効力を信じて、害虫の発生に適する環境を自ら作っている。

レイチェル・カーソン氏の「沈黙の春」が発表される前で、まだ日本では農業の健康や環境に対する悪影響について十分に認識されていなかった時代に、石井先生が的確なご指摘をされていたのは驚きです。また、この半世紀の間に多くの要素技術が開発、実用化されているにもかかわらず、これらの問題が今なお農業に係る問題であり続けていることも驚きです。

食料・農業・農村基本法の改正時期を迎え、農林水産省が検証部会を設置して昨年からの検証作業が行われており、このままでは日本の食料生産が縮小の一途をたどることが明らかとなっています。「みどりの食料システム戦略」によって食料生産と持続性を両立させた長期目標が掲げられましたが、前途は多難であると感じています。石井先生は講演の中で、「害虫は絶滅しない」ともおっしゃっていますが、変化しながら次々と出てくる前出①～④の問題について、常に客観的な視点を持って取り組むしたいと思います。

植物防疫は、新品種やスマート農業等のように 100 のものを 120 にするのではなく、70 に減るものを 90 で食い止めるような仕事で、世間の注目を集めることはあまりありません。しかし、かつてないほど食料供給に不安定要素がある今、その意義は 150 以上あると誇りを持って仕事に取り組むたいものです。

（茨城県病害虫研究会 会長）